

吉川幸次郎

文明の三極

筑摩書房

文明の三極

昭和五十三年四月十五日 初版第一刷発行

著者 吉川 幸次郎

発行者 岡山 猛

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号 一〇一—一九一
電話東京二九一—七六五一(代表)
振替 東京六一四—一二三
印刷 大日本法令印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社
©一九六六吉川幸次郎

目 次

文明の三極

東洋におけるヒューマニズム——第29回世界医師会総会特別講演——

中国の書物について

周礼について

近世読書人にとっての「周礼」 五 哲学の書としての「周礼」

五 文学の観点からみた「周礼」 六 テキストの成立 六

今文派と古文派の「周礼」観 七 鄭玄の三礼の学 五 六

朝時代の「周礼」学 八 唐の賈公彦の疏 五 宋以降の

「周礼」研究史 八

宋慶元版「漢書」景印本のために

六朝文学史研究への提議一則

中国人と外国語——「出三藏記集」と劉勰——

小尾郊一・花房英樹氏「文選」訳注のために

三

九

三

五

五

六

一九

二三

杜詩と史実

二四

「杜甫詩注」著者のことば

二九

私の「杜甫詩注」

三三

杜甫と王安石

三八

杜詩又叢緣起

一七

附 訳文

一五

「朱子集」解説

一六

宋詩概説漢譯本著者序

一六

附 訳文

一七

訪中余録——出版と書店と——

一七

郭沫若氏西江月詞釈

一八

緑楊唱酬記録

一八

古代青銅器展を観て

一八

文化交流についての希望二つ

一九三

韓国美術五千年展を見て

一九四

*

「万葉集」の漢文——附、旅人凶問歌臆説——

一九六

仲麻呂在唐

二〇〇

徂徠の購書——徂徠余録——

二〇九

茂原市本納徂徠遺蹟

二一六

「国書総目録著者別索引」のために

二四一

海保元備「漁村文話」解説

二四三

*

「東洋学の創始者たち」序

二五三

三つの京大

三五

狩野直喜氏「論語孟子研究」解説

二六

「漱石書画集」のために

二六七

池田大伍氏「元曲五種」跋

二六八

阪倉篤太郎先生の思い出

二七八

三島海雲翁と学問

二八〇

斎藤勇氏著作集第六卷「日本・中国文学論集」解説

二八三

倉石武四郎博士哀辞——昭和五十年十一月二十二日、青山斎場にて——

三〇一

倉石武四郎氏逸事——「中国語」編集者への書簡——

三〇六

宮崎市定氏「アジア史論考」のために

三二〇

川田茂一氏追憶

三二二

大山定一——人と学問

三二五

業績半世紀——「貝塚茂樹著作集」のために——

三三一

鈴木俊氏追憶

三三

武田泰淳氏と私

三四

内田穰吉氏「巴里より巴里へ」

三七

村上利三郎氏訳「パンダとチンパオ君」序

三八

船津富彦氏「中国詩話の研究」序

三〇

大仏次郎賞選評

三四

「立春」の歌人に

三七

*

「学術文庫」に収める自著四種のまえがき

四〇

「中国文学入門」まえがき 三四 「論語について」まえがき 三三

「唐代の詩と散文」まえがき 三六 「東洋におけるヒューマニズ

ム」まえがき 三六

「中国文学雑談」序

三五三

神戸高等学校校歌について生徒諸君への書簡

三五五

週刊誌の揭示板に

三五九

*

あとがき

三六一

文明の三極

文明の三極

人間はなぜ善を好むのか。人間は物質であり、物質としての運動の方向がそうさせるのである。すべての存在は物質であり、物質であるゆえに、すべて運動し、運動の方向を共通にする。世界の調和を成立させるべき方向である。宇宙生成のはじめにおける物質始動の方向が、現在もすべての物質、すなわちすべての存在に、継承されているのである。人間も例外でない。手近な実証として、朝おきたばかりの人間は、もっとも善をおもう。人間の生理を形成する物質の条件が、睡眠によってよい調和にあるからである。しからばなぜ人間は悪を犯すのか。悪は偶然である。人間を形成する物質の条件が、主として欲望によって、バランスを失うという偶然によってである。

たとえばそれは明るい鏡の上に付着した塵埃である。欲望を抑制することによって、塵埃を除去すれば、物質の必然である調和への方向をとりもどす。

物質の方向が調和にあるのを示す典型は、天である。日月星辰の規則正しい運行は、もっとも完全な調和である。日の軌道が南北に移動するのによって、地上に春夏秋冬がもたらされ、植物が成

育し、成熟するの、ものである。天も物質である。人間も物質である。両者は、物質であることによって連続している。人間は天のごとく生きるべきであり、また生きることができる。

運動の方向を天と完全に合致させる人格が、現に地上にある。堯、舜、孔子など、諸聖人がそれである。つまり地上における調和の典型である。ところで聖人も人間であるから、物質である。同じく人間という物質であるわれわれ凡人と連続した存在である。われわれは遠い連続としては天を、近い連続としては聖人を、典型として生きるべきである。具体的には、聖人の選択した古典「五経」またその言行録である「論語」を読み、それにしたがって行動すべきである。

すべての存在は物質であるから、感覚に触れる。感覚に触れないものは存在でない。それを存在とする仏教は、虚妄の迷信であり、それを信ずるのは、人間への冒瀆であり、存在への冒瀆である。死後の靈魂は、存在するはずがない。何となれば死とは、人間を形成した物質の飛散だからである。もっとも刑死者その他、不自然な死の場合は、物質の飛散が不完全であるため、残存した物質が幽霊の形を取ることが、稀な例外としてあるかも知れない。祖先の靈魂を祭るのは、以上の真理が確認されるまでにおこった習慣であるが、同族への愛という善の方向への運動として容認される。

以上は、十二世紀の中国の哲学者朱子、実名でいえば朱熹^{しゅき}、一一三〇—一二〇〇、その説の重要な部分の要約である。うち物質という日本語におきかえた原語は、「氣」である。説は、孔子、孟子の説ががんらいそうなのであり、ただ孔孟の言語は断片的であるのを、体系化したものとして、与えられている。またその時期まで数百年の中国は、仏教にひきずられ、そのため孔孟の真意が暖

昧になっていたのを、是正し、古代の正しい伝統を回復するものとして、与えられている。

またそれは朱子個人の思考でない。さきだつ十一世紀、程顥程頤兄弟ていこうていいによっておこった宋の「道学」の説を、集大成したものである。そうしてこのいわゆる朱子学、ないしは程朱の「道学」は、以後千年弱にわたり、今世紀の革命にいたるまで、中国正統の哲学であり、歴代の政府から国教的な地位を与えられた。

ただいまの人民共和国では、朱子の哲学は主観唯心論と判定されている。そうして最近の孔子批判の波の中では、孔孟を祖述して、過去の中国をあやまったもつとも重要な人物の一人として、まっとうから批判されている。ことに天と人との連続を強調する点が、今は孔子の謬説の重点とされる「天命」論、そのイデオログであるとして、きびしく攻撃されているであろう。私は最近の中国の論調に充分にくわしくないけれども、そう予想する。

しかし、それほど唯心論と批判される朱子の説もまた、唯物無神論的な部分をもつことが、以上の紹介によって理解されよう。そうして朱子みずからが、それを孔孟の再構成とするのは、部分的に正しく、部分的に正しくないと考えるが、それがこの国の文明の古来有力にもつ方向であることは、疑いない。

こうした中国文明の伝統は、西洋文明の伝統との間に、はなはだしい距離をもつと思われる。ここに私が西洋というのは、キリスト教が権威をもつ地域、あるいは近い時期まで権威をもった地域を、一括する。一括が西洋文明の専門家を満足させないこと、百も承知するが、中国文明の研究者

である私は、あえてそう一括してよいほど、兩者の間の距離を感じる。

中国文明の伝統には乏しくして、西洋文明の伝統には顯著であると、いつも私が感ずるものが三つある。かつそれらは西洋文明における三位一体のように、私には映ずる。

第一は、すなわちキリスト教神学である。神は他の世界における存在であり、人間と非連続である。非連続なればこそ神なのである。朱子のいう天はそうでない。人間と連続して天なのである。また聖人の概念は、神を地上に設定するものといえる。しかし聖人は超越者でない。凡人との連続が、いつも強調される。「人は皆な以って堯舜たるべし」、孟子。

第二は、西洋における虚構の文学の伝統である。ギリシアの叙事詩、詩劇、みな虚構を価値とすること、アリストテレスのいうごとくである。必ずしも他世界への想念ではなくとも、英雄、神、異常な事件、要するに凡人の日常の生活をとびこえたところに題材を求め、価値を求める。中国の文学史は、そうした形ではじまらない。ホメロスと同期の「詩経」三百篇が歌うのは、名もしれぬ凡人の日常の哀歎である。陶淵明、杜甫、白居易、蘇軾、みなこの伝統の上での大詩人である。正式な虚構の文学としての戯曲と小説は、三千年の文学史の末の千年の期間に至ってはじめて成熟する。それまで二千年の散文は、原則としてすべて実在の経験を叙述する。このこと拙著「中国文学史」岩波書店刊参照。

第三は、西洋の自然科学の歴史である。その歴史が神学と反撥の関係にあることを、私は知らぬでない。しかしそれは西洋内部での葛藤である。非日常への想念、あるいはより遠い世界への想念

を基底にもつ点では、文学の虚構とともに、神学につらなって、三位一体と感ずる。中国もまた独自の自然科学の歴史を豊富にもつこと、イギリスのニードム教授の大著の日本訳が、現在刊行されつつあるのが示すが、その歴史の形態は、西洋とことなるであらう。

以上を要約すれば、より遠いところに価値をおきやすいのが西洋なのに対し、遠いものをもむろん求めはするけれども、より多く近いものを重視するのが中国である、といえそうである。ホメロスとダンテとシェークスピアを、中国はもたない。神よりも人間を、英雄よりも凡人を、虚構よりも事実を、それが中国である。しかし西洋は司馬遷を、杜甫を、もつかどうか。プルタークは、「史記」ほどおもしろくない。西洋の詩が、お姫さまと騎士の恋を脱却して、杜甫的な日常を歌うのは、つい前世紀以来のことと見うける。中華人民共和国の政治が、何よりも農民に関心するのも、もっとも日常を重視する人人であるという要素があろう。

ところで日本はどうか。日本文明の伝統は、以上の文明の二極と、似たところをもち、似ないところをもつ。手近なところで、日常の文学として、和歌人口、俳句人口の、現代日本における汎濫は、宋以後の中国における市民の詩人の洪水と同じく、西洋にはない現象である。神への熱情の乏しさは、中国ほどではないにしても、西洋とことなる。正月の神社仏閣のにぎわいは、必ずしも信仰の表現でない。

しかしまた虚構の文学の歴史は、世界にはこつてよい。「源氏物語」が書かれた十一世紀、中国では大歴史書「資治通鑑」は書かれても、小説はなお寄席の講談として前史的な存在であった。西